



芭蕉翁附合集 一



序

智賢佛社の道にさらありよ海河の
もれさのまよる事と書ふよう
下して何と枝物ふせん家子御徳と
りあもれり今却鄙みけりま
まのまれ所物さうさうまのわつれ
及もせふあう今今とらも多く

幫同の族はさきさきと流儀を更の
前小指乃まことと彦弟包くの流儀
是申れ運百いりら流儀ん今名
友人の選重る集のりぬとぶふ流儀
此一句之の云揚ふ流儀り水と彦の
主人とに此義とふまこと乃白く
あつりこいり人くふんせをやそ
翁生涯の流儀と流儀りりりりり

何うら免生時代といら流儀
が序破と急ととつしむ是と事ら
札よ不投して類著りのせよう中
乞るるあつり子とととや梅子う都流
深切あれと共人のさくようんを
芭蕉翁附合集可あるを
鳴呼たれと熟讀せん仇と
玉女あ生兒木ると人な様と

肥前の女あゝあゝん

菅中居菟多太

~~太~~

蕉門俳諧の附句を意味深長な介
の妙なりと感念述ぶるものよし
主筆のみ易なり流転なりよるを
句あつての若あしてあ又之句乃
附合年を夢見る向にあたるはあ
校抄のあひもつらうと一巻の
ああ万化序被意又四時花鳥月
れあ情をゆへりあひく蕉公ねと

桑根とて一葉何法と志すも
法集よふと書くと書くと
しとともと書と書と書と
若くしと書と書と書と
拾ひ集先一帖と列一冊のり
吾中草今所よ乞てと

宝曆辛巳冬

水と書 柳鏡日所

芭蕉翁附合集巻之三

延宝五冬

二字返音之百韵

あゝ河も水も河縁汁 桃青

室の心も心も心も心も 信章

と合ぬとと教のわや乱らん 信純

物者も心も心も心も 京 吾

お魚れ水用も河も池の色 京 吾

海老新吸交りも折良ハ餅 徳 孝

芭蕉庵

素堂

伊東

智波の後を湯ふり月流て
 文て志ツ小役の姿
 守身や余亦子懐くと萩の夢
 難波の芽を修路のよも市
 扇舞をひあそぶくとあそぶ
 皆せ小判や袖よとあそぶ
 物際よ現り志くぬをあそぶ
 下箱一枚乞式の志と
 志 池 志 志 志 志 志

守堂り心ひ袖くとあそぶ
 籠さ心流て肩はく
 糠打の籠のと云つのり
 志くはのりて後接の切流
 嘘つ志のほもと志や志のん
 志の一体子ん也もやの月
 志の又朱菊と志を夕る志
 志の鏡付の序の欵志
 志 池 志 志 志 志 志

芳野川まきも流るる水茶碗
 紙袋より粉雪解り
 凡そく揚枝百本割るるん
 聖帝持の紋此持り色
 双六の言菩薩も定又修進路
 風生の御とをくひるる
 目のふよ清田舎若れ之瀬川
 かゝる川に潤ををりり
 茶 碗 紙 袋 凡 聖 双 風 目 か

小庵紫の太蛇の恨の形
 かゝの版巻湯とあじし中
 一二献終る年しく暮るる
 月を昔の親に友連
 蒼々草花院そくくそ
 狗鼻目の層乱るる
 勝負も本れ秋の流風子
 下置る女も浪の写る
 茶 碗 紙 袋 凡 聖 双 風 目 か

願ひまゝにふれ忍びぬるも
古い世帯の芽糸文り
塩巻の人無ひりり泣くも
文正り子を志願あつらん
今より新報と書くと
物よあつとに物あくとや
ま所も物の二階と遊んで
何そと同くも猫の目北寄

論 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

月影や似せの琥珀と書くと
隠元衣次 況々 喜 喜
法の子身即此花ちりり
余波の居も一羽とゆく
上下れ歌の白う山と
百美名の物白ふ 喜 喜
昔棹今北帝の海 喜 喜
守隨松女北歌の撰集

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

掛乞も小所り多しと云き山
是あり朽木の枝よ揉みあふ
狭良鼠船着てと雲の月
婦り入及も生よりり
海もや近い以ましく山の枝
こゝ梁人のまの葉の及
縄帯のこもむ然しと書れり
是そむ世の世合ねある

山 雲 月 婦 海 梁 縄 是

糸宗の馬からふとや 舞云
市女が朝うを物こゝるんね
二杯酒をとりて之 隠さ
之筆の山を引かありつ
万代の古葉の雲よと鳴あある
雲れあられの火の羽衣
田子此浦浪舟とせく負持賣
ふ着尻て鳴る 雲の物あ

舞 雲 月 婦 海 梁 縄 是

海を渡りて後日 疾

季

松の根植るの 綿 たる

季

従してや 仙女の髪をく 散らねる

季

風 鏡の 網子 傳の 月

季

衣を 嵐の 川に 流すの 状

季

洞しと 霧の 雲の 霧

季

衣を 絵の 染うことと 衣の 風

季

白ひくけしと 影を 志す 藤

季

衣の 香一 費二 百 香 くれと

季

所 花を 了す 物 ありて 久 山

季

空 物 の 多 あり ひと 衣を あり じ

季

函 貝と 如く 染 染の 小 巻

季

衣 縁 寄れ 袴の とうと 履 ころと

季

衣 合と 袴 万日 糸 たり

季

衣 又 紐 舟を やう 履 衣 者 衣 衣

季

靴を いて いて 草 鞋 志 女 衣 衣

季

兼儀口と流れて、扇よりけ

流

木質の夕影 凡の之節

流

韋達天も格し御ふ子花柳

流

出せやあせとある川舟

流

是も也追子顔ある波の月

流

古の流人う草の穂乃 夢

流

物の緒振舞よとるこは 丁

流

木権子れ扇山の美乃 雲

流

人形の流の下より 柳

流

畠よかりるき花 淋

流

此翁茶をとりて半七交と

流

泡より 流白砂より 海

流

法路深無ひよ花のよとる

流

新代山年あかしのま

流

然室亦くま
之字中略く百額

清をね部上瑞理小唄を室の花 信章

石版とさよ 道弁人形 信徳

吾い顔菊の山より書見く 桃青

古意の流香をのむ月と 孝

夢うま氣は浪のつとひ 海

厚よふるよあやう友達 吾

又間に糸くさ 月子、ま流く 孝

松を流撫子 礼令の杖 流

ようけ者お流のやうまそく 吾

おさひのらうらふ志先教 吾

も細愛りつ夕暮の事あるよ 流

門をくくと扣く出か 吾

海国友を遠くを頼まれて 吾

二人のあ乃字人小 流

竹の子ちきれつらうも此身は
續ちやつけ世徳の如衣
石花菜あわのころましく雨をと
浪せき入る大空の刻
つらう地獄の窟(まろはんと
後杖程の骨を碎くは
酒の月後書いらのさあつり
隣の内年おありのあ

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

肩を五袖ふつらうも 花 花
中風も今名世帯持り
端の扉入江の堀子まを分る
の月屋ふしと鴨の鳴らん
山陰子精を蔵へ 松のあ
之十子杖まらる 花
い花や後成代の本まらうけて
寂蓮法師小説新巻意

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

八尋波顔栴立山もあうりりり
 雲を増補し時多ふ秋
 新ひとり長月比の章 報者
 世の宮れあさうう給一板
 驚かきて憂世と濁る縁あれや
 逢ひ子れ無様うぬるさう
 傷を致人くいふと絶し子
 忍死とめて安んじまはれ

素 素 素 素 素 素 素 素

正之此書を運しる 抱うさう
 多し道多きとされさう
 前も池東殿山の大臣さ
 花の葉は所中と多ふ
 吾柳れ繁ゆいくくかむ
 家老子物る小蝶 嘗
 連がよき歌謡の蛙啼
 飛ん音り砂よ夜の夕暮

素 素 素 素 素 素 素 素

意の古き雲が隙へを打ちつけ
沙朱糸下 彼風の玉を
白中より山林竹木指切らるる
末世の瓦片菩提取の月
十華の初高のうい糸秋文を
孤陸にわく反滑やとさるる
道の系絶尾の底に風涼し
いぬい者よる暖簾の浪
春 秋 春 春 春 春 春

意の剛あゝ瀟々く人おどり
首を下げのこひ情をく者
其文中を下息しかきくよりのと
かゆくのまをよ麻所わく
幾も大出馬の豪かをく
鞆に信正の扉入の山
いぬい者よる暖簾の浪
かゆく麻所わく
春 秋 春 春 春 春 春

善の月橋の情あつて道と
 その楊柳迷皆如佛
 忍性の眼のきらり 湯の汗
 藤糖のめくり 固果則
 る心やさる家よ一つの紫の若
 友令うして 十貫目籠
 大八や忍の車の志のあらん
 の肩と下とくシ教の若
 善 善 善 善 善 善 善

山うこれかき 禪よ麻うとち
 善茶の目白羽織よそち
 膏菜よ赤れ実のうとち流石
 俊毒房よよ谷 海と月
 山うく湯船隔く水をさし
 海子の烟煙石の霧よ
 白あけし 花の風吹の懐懐ある
 燈取中よ始りなき 善
 善 善 善 善 善 善 善

然彼も中るかきみ引連く
 山又山や之玉のたす女
 冥子能安気よをくもく子り
 松風そあそく混紙と解く
 左物の危れ芭蕉葉又六反
 楚の傍らの横河の女
 邪邪の星の眠りの月明く
 ときくときくも金糸と氷

孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝

子よりり十万億も鼻の先
 家ホウも先の守武菩薩
 着赤れ小弓と味線ついの山
 四竹篠そ竹の歌 海
 婦流そ御伽比並危の初るも
 後あそそ誠の佛そそ引るも
 譲うまそそ苦念れ層と反やうそ
 小糠みうそそ草徳つり

孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝

旅松浦島々や嫌々人
 籠て籠のちきりやう海
 ころゆきふざくく汁の腐情
 生理のちしれ行駕と抱て
 身や荒白赤天々鏡原子
 屋云一海々羽筆の 厚
 靴原

延宝寺の事
 飯何の百韻

物の名も踏や古江のいりれあり 信徳
 あふのく、空を百余里の事 桃音
 字れ吾か子の事の難解をあり 信章
 ふんかれ赤風りりり 徳
 然をひ向くも月の腐々あり 春
 あかと雲より厚の信夢 素

星の幾粒の下葉乃移ひぬ
 尾危う融子鏡かきうん
 判とくづいふる風の末うや
 又き山がー海士の呼吸
 一念の禪とめく七やとひ
 かくちを界の火輝いづく
 紙浮海陸停路のふらうつづり
 林の隅籟と越えー響ぬを

流 香 流 香 流 香 流 香 流 香 流 香 流 香

縄沿子女の髪や切つらん
 流石別道のちんをりる
 骨のうらさあひをめて顔隠し
 之切るうり踏まての香
 夕陽暮小風骨は流とあの日
 木陰こころのふもふ汗衣
 夕暮の風情さぢんぶとちん
 物よはうえーあつた道り

流 香 流 香 流 香 流 香 流 香 流 香 流 香 流 香

天津丁借金列て取りたり

妙苗ゆきと二月中旬

新巡をぞよ次も懐かしくん

八百拾拾教古も新く

狭張りや十方世界法の夢

凡舎を赤土の夢

いりさう地獄臺れをの杖

溜りぬやうよ杖てけ月

言

言

言

言

言

言

言

言

約取く百拾赤靴く香の香

東坡う小者米の一町

さき星へる指の舟無ひりり

候子の深木土急のさんを

ち用知し山を縛地の香鼠

岩水経く夢の破のこし

異凡者全株測り投捨る

吹矢と折く星際の日

言

言

言

言

言

言

言

言

秋のふね連隣の茶屋もさきくこ
相虫の跡生 煙たところく
急料と連くきりく末れて
しり業平と旅人やあき
未練父の物衣袋より刺し時
貧乏く節の秋のつづる
ゆきあきくせも 世のころはふ
松江の浦乃お店乃響く
景 景 景 景 景 景 景

深き桶は鏡のつらとほまかけて
平月白こくくおくの黒網
るあふらん就の軒れ橋りよ
又大臣の令つらと 景
よ道もあや十二景のそ降 景
あ及の代よりをま山の月 景
山田房麻の業とくくまきあき
公家の水福あきあき 景

關東との掛をまうよりまのあ
火縄の管ぬき色好らん
本之位編みをも張らりて
貢の箱や怡なりある
肩の象の難波の物の足中
費えりて子孫かきれま
それの年陶の氷解そめて
ほ純切なる橋の下あ

龍 香 香 龍 香 香 龍 香 香 龍

物とぬふ中のる此際子に教
急の中らさ給ざりまよら
穿るるうとてぬ浮名と知うけて
い川の土をせいのあ一乳
朝比奈のうぬくぬくはまの
地獄やうやまき長やうれや
小柄な紐の枝れたらひま
減令のり新掘り流るる

龍 香 香 龍 香 香 龍 香 香 龍

ふも振平て傳りしと神 寄
名産印く多て悟政のふ也 寄
漢の文字をさしもささ定くは 寄
控のりする六尺の月 寄
秋やむう二代目の地産ゆあ 寄
復らく帯外一をくあ 寄
花の枝縁醜く驚切れく 寄
み一兜の共殿人參耳草 寄

長を成まを引くる厚 寄
抄子ハ焼くきり印まつ 寄
中志り下女とくの鞠ひよ 寄
赤前さ雲の結をあびうす 寄
酒桶より辱の一句余されく 寄
借込ハ人ま 寄
表かくもを破く差もあし 寄
蚕子喰道く事ぬあねく 寄

君しく仇の志絶ゆるをぬれ
 志如ぶるすれ負る跡あり
 志弱し由親王の由云ふ
 気如えんおらるゝ志かひの楯
 飛鷹殊冠殊ありとも圍の月
 由しとや面を法ぬとのあ
 翁の布の家装とひるぐし
 松を貴代の志地たるん
 志 志 志 志 志 志 志

小糸の志を早ゆに尋ぬれえ
 かれし志を法して一ツに如雲
 大雷徳禱と踏で言をくらん
 友お志もお志の果
 江戸の志如志たるの由とや
 徳の白志もお志らうぬ志
 志 志 志 志 志 志 志

憂^ニ方^ニ知^リ酒ノ聖^ニ

命^ヲ始^テ覺^レ錢ノ神^ニ

酒ノ世^ニ酒白く食^ス

翁

眠^シ陽^カノ波^ニ一品

持^テ子孫^ヲと^テ清^ク人^ノ鼠^ノ

月^ヲと^テ酒^ヲと^テ竹^ノ角^ノ

浪^ノと^テた^ラと^テ物^ノ鼠^ノ

朝^ラと^テ酒^ヲと^テ紙^ノ

浪^ノと^テ酒^ヲと^テ竹^ノ角^ノ

朝^ラと^テ酒^ヲと^テ紙^ノ

浪^ノと^テ酒^ヲと^テ竹^ノ角^ノ

朝^ラと^テ酒^ヲと^テ紙^ノ

浪^ノと^テ酒^ヲと^テ竹^ノ角^ノ

朝^ラと^テ酒^ヲと^テ紙^ノ

浪^ノと^テ酒^ヲと^テ竹^ノ角^ノ

朝^ラと^テ酒^ヲと^テ紙^ノ

傾城の後を控へ新代より
 羽とりあり角とりくは川流カハシユ雄
 化しゆくヒツキ控を切てまの月
 破蕉 徳って詩の上と決り
 朝露子酒臥とツル遠く
 つらしきくぬひの松浦行權
 めつるるありやくの芒花
 女サメの私サメの蓋と乃む
 品 角 棠 露 翁 晶 香 棠

控へぬ氣に六十の刺ありて
 水取りはれゆくせりウグイ庚し
 人の情異 穂長の青れ慈子アハ
 松田くびあき 吾の 嘆
 こころや陣中子アハ氣新く
 山と地ふれて餅と食アハる
 邊と舟の月子伯夷く是アハ流ふ
 ところこいあまのイキトホリ懐 子
 品 角 棠 露 翁 晶 香 棠

見くくしと艶書をやくや架枕
 第ひく人やよぬる 魂 晶
 曉の寐をとおよふて
 つおよぬをくくくり
 くらと栖序山の列をよひく
 柳小くくして瀑布と滝谷
 崇 角 翁 名 晶 崇

ちり
 摺伸わがるまの巻の巻 其角
 すの法所切の衣のみくく 翁

酒債尋常此處有
人生七十古來稀

清あらんど年と合する酒債外

共角

冬湖口そまき 駕し馬に程 翁

干紙ハコと夷子園をゆるらん 今

之縁 人の智と流しむ 角

月の神かろろと眺る猿のうへ

左

鴨の羽志をる 波海をこし

翁

恥きぬ借とあやうきお蔭

今

とくれ山崎 傘と翁

角

色竹のどろろと藍子深列て

翁

物傷の雲よあ及と急

角

一乃娘里の店家よ養は色

翁

新あよしつと云頭と頭

角

竹る忍の髪と啼うり

翁

うき世よ泥むを食の枝

角

背の尻負をくくくく人儀
 芭蕉のくくくの蝶下見も
 腐しくくくくくくくくや
 裸くくくくくくくく月
 舞入の近づくくくく
 くくくくくくくくくく
 鳴よ黄令のくくくくく
 足細くくくくくくくく

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角

枯葉のくくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 織のくくくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 山をくくくくくくくく
 埋火のくくくくくく
 下目^テのくくくくくくく
 物^スのくくくくくくく

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角

くらいよりあけぬきけり吹調^{ニホ}足
 みらりめくれ夷去るぬる白
 神土の程の丸森まろくく
 八夢の物乃をを告つ
 待りきんと集ると食る酒債か
 長湖の唇くかす^レ興^ニ吟
 翁 左 角 翁 角 翁

夏おく仙傳

柳

梅より二月中旬妙なる山
 て下の吹うき子家末を春
 夏をおく古苑^ニ洛りく
 志^ニ流き^ニ山^ニ風^ニ小^ニ香^ニを^ニ事^ニり
 雲よりり^レ吹^レ馬^レ此^レ河^レの^レく^レと
 谷の穴にようく^ニ看^レ板
 上く古を^レ鳴^レの^レ中^レ風^レ吹^レ而^レ已

ふ里の羽も金糸の秋
執事

いふく此もあつうーやまのま

孫碩

うれて蝶の差いふあゆる
公孫

破風は小日新やよめる夕涼

公孫

煮^レ茶^ヲ 蠅^ヲ 避^レリ 網^ヲ

素堂

合^ニ歡^ム 醒^ム 馬^上 上^ニ

合

かすれり小田の水落るく

公孫

月^ノ代^ノ見^ル 金^ノ氣^ヲ

堂

露^ノ殺^ス 係^リ 玉^ノ 涎^ヲ

合

強旭り物書あくる破の中
曠と左右小くくさる竹

犁^テ帚^シ駈^ル 偷^テ竈^シ

ぬきさ都子ぬるか毫屋

くゆりくぬ首くさきる松掃

気とのひ篠子何と差足る

舟^ニ鐘^ヲ 風^ハ早^クノ浦

鐘^ハ絶^テ日^ハ高^ク川

顔もろり子苗の流よとる

食もすすぬぬやり火の教

詫^ハ教^ニ三^ニ社^シ 本^ナナラ

顔^ハ使^メカ^ニ車^シ 填^メイ^ニス^ト

花月丈一山一開^ニ

藤と杖つくきの字くひと

葉^テ銀^シ帖^一寸

笠面の湖や玉と懸らん

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

籀

朝りうけ 頸の 証とわや

風 飢 喉 早 乾

うしれつる 木 糸の 糸の 糸の 糸の 糸の

内を 火と 海と 江の 中よと

霧の 籬 顔 孰 興

震 浦 月 潜 正

ぬん 見く、を 女子 幼と ちの 幼

こゝれぬ 旅の 杉 株と 根 括

令

令

令

令

令

令

令

令

山 伏 山 平 地

門 番 門 小 天

鷓 鷯 窺 水 鉢

おれよ くりりて ぬる 雲やけ

奥 ふうき ぬ ぬ の ぬ ぬ ぬ ぬ

臨 谷 伴 陸 仙

令

令

令

令

令

令

町を杖をせとさし一旅のはと

旅

一馬ととりの子書風の月 翁

山陰子刈田の顔のあきあひて 近遊

武者追つや一子川のあき 兵角

くれくるるをよつやうき横のれ 霧花

とろとぬき子校配く雲 近花

傘の陰をうくかいらくあけく 翁

あふいへく一旅のの成 近

暑き日れ汗をうあしむ猪の夢 せき

旅一戸のうきうりしる 遊

水をとととといひれ法もあく 角

笑へりる傍に待つうせせ 另

意と改つ編意山の奥ふく 近

志向るたのたと白く風葉 翁

月清く夕立は流るるすの味 蓬

あまつつらき裡てしきん 角

花咲くくく 余美の居 口カ

歌板ひらふ 山吹の栞 セシカ

信濃物やあきらめは仗のきよて 浜

穀石いんふも ぬん 居 浜

橘のあまふとあふ集を言終り 心

舟よゆきと 善の 登 口カ

おうけを忠ひあさふ月晴く セシカ

契今とやソくる 費のあふ居 蓬

いとちりて 中張とふとる 林のあ 口カ

九編指すす 居上とちりら 浜

爪の音あふ 夜徳後といふや 蓬

大口あふる 居の音掃 翁

うもふく 鳩の群えふあふて 浜

独り居を 編くくす 善 セシカ

一池の形足のもよお 独子をか
 ぬをぬぬへき 誠の誠ひ
 面うけて 隠ふ 向ふ 男つさ
 みちしと のぬさう 獅子舞
 裾減り 真の 瑞乃 ちか 打く
 柳のふれ すすきう ぬさ
 独子
 公孫
 せか
 蓮
 浜
 口カ

江戸橋つがよ ちん いくし ぬれ
 薺畑の五ねふ かりらる 月
 貝ひろむ しく ゆく 欲 別く
 碎てをる 人の 肩より つく
 ちの ぬえ ぬし けり ちや 祖 父 孫
 根松 苗 杖 蝶の 啼 ぬ
 子
 孫
 其角
 鼠舌
 独子

池の橋渡し始ぬ垣 結く

角

これとハ帆の足もろ 子紙

子

世れ中と盡よのうれろ茶此 網

子

妹うかいらのかくこやこま

子

うもてふ儂の切のちろくよ

子

美及とちろく 園の朝風

子

津のふれなふじくとおろそ

子

ニおとさうろのはく 一 傳

子

一巻の道新とさむ 此 子

子

苗代めえる夜ら 傳うて

子

鷗子の葉のいら月を 伝ふとんく

子

絲を下りかりる 暮の夕月

子

志強うのし給とせぬおの境

松江

一羽別々ふも一箱

箱

枯葉よよく松のこもりして

る良

田中の鳥れとさうくれけ

依く

月ほそくともあかきるを新し

泥若

水風ある門のそりこそ

水岸

空の糸綿ととととと 桜ツバキの音

凡象

るみとんせし 葉のうせ給

夕葉

旅抱女あうの情 帰る

苦嬰

傾城うけとらるる 明ぬの

執事

時をく小後うう動人等の語

奉白

火燵の味小後と次人

翁

和風よをれくら懸と足のうて

淡石

新まのいんくき湯の山の月

工次

後一ツ之こサト々よりまの秋の夜

若角

昔の鏡面とゆらとまの

ト千

鏡子やもいしをる娘の名を

筑音

候二うき子の名ふしきあ帯

白

若原のちよ小子の口の松ひうん

翁

張うぬしきく懐まの交

石

あひ

庭のわきを火たてるとも
うらやまのたぐひのたぐひ

あ

